

IV. スクーリング講師（対面指導者）の役割

※「スクーリング講師」は、スクーリングの実施主体（自治体、または、支援・交流センター）が選任する。

スクーリングにおいて、講師の方には主に以下のA～Fのような役割を担っていただくことになります。

- A. 遠隔学習課程の流れについて受講者に理解してもらう
- B. スクーリングの位置づけや意義について受講者に理解してもらう
- C. 受講者が自分に合った学習ができるよう調整をはかる（学習相談）
- D. 自学自習方法を指導する
- E. 受講者とセンターをつなぐ仲介役となる
- F. 複数の受講者で行うスクーリングのコーディネーターになる

これらは1回やれば終わりというものではないでしょう。繰り返し説明したり、効果を実感してもらえようように学習活動を工夫したりする必要があります。では、詳しく見ていきましょう。

A. 遠隔学習課程の流れについて受講者に理解してもらう

スクーリングは受講開始後、大体1か月ほど経った後の実施が通常ですが、実際に受講者に会ってみると「どうしていいかわからないまま課題をほったらかしてあった」という例や、逆に、「テキストも見ずに、いきなり送られてきた提出課題だけに手を付け、できないまま結局投げ出してしまった」というような例がよくあります。つまり、遠隔学習課程の流れそのものが受講者に理解されていない場合が少なくありません。帰国者の多くの方にとっては遠隔学習課程（通信教育）という学習のやり方そのものが馴染みのない、わかりにくいものです。遠隔学習課程の流れについて受講者に理解してもらうことがスクーリングの場で真っ先にやるべき重要な課題になります。

最初に受講者に送られる物は、教材の他にも、「遠隔学習課程の受講のきまり」「遠隔学習課程の流れ」「CDプレイヤーの操作方法」「コースの受講案内／遠隔学習課程の流れ」（各コースの「受講案内」の裏に「遠隔学習課程の流れ」がプリントされています）「課題」などいろいろなプリントがあります。これらの書類が、何を意味するものなのか、受講者一人ではなかなか理解できない場合もあります。送られた物の意味が正しく理解できているか、チェックをお願いします。

そして、テキストを勉強し、練習を重ねてから課題に取り組むこと、その合間にスクーリングで学習成果を確認しながら学習を進めていくとことなどをわかってもらう必要があります。

B. スクーリングの位置づけや意義について受講者に理解してもらう

スクーリングとは、教師が全てを教えてくれるような通常の教室とは異なるということを受講者に徐々にわかっていってもら必要があります。説明も大切ですが、受講者がその意味を感じられるような学習活動をスクーリングに取り入れていくことが、受講者の理解につながります。以下①～③のようなスクーリングの場の性格を講師自身が意識し、学習活動を計画していくようにお願いします。

- ① スクーリングは一般の教室での授業とは異なり、自学自習を補完するものであること

- ② 日本語を使った生のコミュニケーションの場であること
- ③ スクーリングは孤独な日常の学習の場から出て、ともに集い、交わる場であること

① スクーリングは一般の教室での授業とは異なり、自学自習を補完するものであること

遠隔学習課程は、本来受講者の自学がなければ成り立たず、一人で勉強することが基本となります。スクーリングは頻度も少なく、いわゆるクラス形式の授業をしていたのでは学習は進みません。

受講者はスクーリングという学習形態には馴染みがなく、一般のいわゆる一斉授業のクラスと同じように、テキストを一課ずつ順を追って講師から教えてもらう場だと思いこんでいることが少なくありません。提出課題も未提出どころか目も通さないでスクーリングに臨む人もいます。まずスクーリングは、受講者の自宅での学習を応援、補完するものであるということ。そして、スクーリング講師は、指導者というより孤独になりがちな自宅学習の「伴走者」であるということ、理解してもらうことが効果的なスクーリングには不可欠です。講師自身もこの点について認識しておかなければなりません。

もちろん、受講者の中には、仕事や子育てなどで自宅での自習時間がとれず、スクーリングの場が唯一の学習の場になる人もいます。このような場合、スクーリングは約束された貴重な学習時間ということになり、受講者にとって伴走者は学習をその場で補助してくれる存在ということになります。

② 日本語を使った生のコミュニケーションの場であること

日本人と話をする機会がほとんどない受講者にとって、スクーリングではテキストを学習するより日本語を使って講師と生のコミュニケーションができることの方が貴重でしょう。自学自習の中で身につけにくい「発話力」「コミュニケーション力」の養成をスクーリングでの目標として受講者にも意識してもらえたらと思います。したがってその機会を確保する意義について受講者と話し合い、教材の学習や課題を慌ててこなすのではなく、日本語を使用する場としてもスクーリングを大事にするという観点を持ってもらうことも大切です。

もちろん受講者がどのくらい学習項目を理解しているか、身につけてきたかをチェックする必要はあります。受講コースにもよりますが、なるべく日本語でのやりとりを通して受講者の理解度をチェックしてみることが有効だと思われます。やりとりにつまずいた時点で、スクーリングでフォローすべき箇所が明確になり、テキストの解説に戻ってみたり、文法説明を行ったり、中国語を使って説明をしたりできますので、講師はスクーリング時間内に受講生との生のやりとりの時間を増やすように努めてください。

スクーリングで「発話課題」を設定してみることも可能です。例えば、次回のスクーリングまでに相談して決めた会話文一つを音声教材を使って発話練習をしてくる課題を立てます。できれば、中文部分を見て日本語を再生できるようにしてきてもらいます。次のスクーリングの時には、練習してきた会話を使ったやりとりを行うことにし、その会話を基本に自分のことで単語を入れ替えたり、役割を入れ替えたりしてQ&Aを行うこともできます。スクーリングの場では日本語を「読む・書く」よりも「話す・聞く」に重点を置いていただけたらと思います。受講者によっては、知識を深めることにのみ重点を置いて話そうとしない方もいるかもしれませんが、スクーリングでは慣れ親しんだ学習方法とは違う方法を試してみる機会を提供することも重要なことだと考えています。普段一人で学習している受講者にとって、新しい学習ストラテジー（学習の方策）を経験でき、効果が測れる場でもあります。スクーリングが学習したことを使ってコミュニケーション

ョンをする場であるという意識を受講者に持ってもらえたらと思います。

③ スクーリングは孤独な日常の学習の場から出て、ともに集い、交わる場であること

スクーリングは、複数の受講者が一カ所に集い、ともに励まし合う交流の場でもあります。受講者同士が知り合えるようなちょっとした工夫をすれば、学習の雰囲気も和やかなものとなります。講師の配慮のしどころです。

また、スクーリングが違った学習スタイルを持った者同士や世代間の交流のきっかけとなり、いつもの一人での学習に違った刺激を受けられる場合もあるでしょう。

自宅でスクーリングを行う場合は、その場に家族がいることがあります。家族のいることにはデメリットもありますが、スクーリングで子や孫に少し手伝ってもらったことがきっかけで、家庭内で子や孫の支援がうまく得られるようになったという例も聞いています。家庭の中で日本語が不自由で孤立しがちな一世世代にとっては世代間交流のいい機会になります。

C. 受講者が自分に合った学習ができるよう調整をはかる（学習相談）

遠隔学習課程の受講者は家庭で自学自習を進めていくわけですが、実際には学習がスムーズに運ぶことは少なく、様々な問題が生じることの方が多いものです。その解決のために受講者と相談し、調整をはかっていくこと、これこそがスクーリングの意義だといっても過言ではありません。学習相談については「[V. 学習相談](#)」で取り上げます。

D. 自学自習方法を指導する

遠隔学習課程に馴染みのない受講者は自宅で一人、学習を進めるイメージが湧かないと同時に、自学自習の方法や技術にも馴染んでいないことが少なくありません。スクーリングの場を利用して自宅でできる学習技術を伝授することも、効果的な学習につながります。自学自習の方法については、「[VI. 自学自習方法の指導](#)」で取り上げます。

E. 受講者とセンターをつなぐ仲介役となる

受講者は、センターに自分の添削担当者がいて、遠隔地にいるけれども学習の伴走をしているということについてはイメージしにくいと思います。そこで、スクーリングで、一人一人の受講者にセンター担当講師がいること、そして、課題などのやりとりを通して受講者の学習状況を見ていること、問題があればいつでも相談してもよいということを伝えていただきたいと思います。このように、スクーリング講師、センター担当講師がサポート役としていることを意識してもらうことができれば、学習を継続していく上での支えにもなると思います。センターに連絡する必要が出たときに、講師の方が代わって連絡をしてくださっても構いませんし、受講者から直接でも構いません。センターのスタッフの多くは簡単な中国語を解しますので、日本語に自信のない受講者には中国語でもいいので何かあったらいつでもセンターに電話してよいとお伝え下さい。

また、コース変更の相談や送付物に関する事等、スクーリング講師と受講者間での相談だけでは解決が難しい場合もあると思います。そのような場合は、センターへご連絡いただければ、センターの担当講師から受講者に連絡を入れますので、講師一人で問題を抱えこまずに気軽にセンターまでご相談ください。スク

ーリング講師は、遠距離で意思疎通が難しくなりがちな受講者とセンターの仲介役となっただけならばと思いません。

F. 複数の受講者で行うスクーリングのコーディネーターになる

スクーリングは、受講コースも進度も学習者タイプも異なる複数の受講者を対象にすることは珍しくありません。このようなスクーリングを行うのは困難もありますが、工夫によってスクーリングならではの効果も生まれています。様々な要素を持つ受講者を一つの場、同じ時間で対応するためには「複式指導」のスタイルを取り入れる必要が出てきます。このようなスクーリング計画を立てるのがスクーリング講師の大事な役割です。

複数の受講者を複式で指導するスクーリングについては、「VII. 複式指導」で取り上げます。

また、人数は多いが皆同じコースの受講者の場合は、多少開始時期がずれていても、コースによっては一斉指導に近い形での指導も可能でしょう。例えば話題中心の「近隣交際会話コース」の場合、文法積み上げのコースと違って、どの課から学習してもそれほど支障ないと言えます。したがって、皆で勉強したい課を選んで一斉授業の形で学習するというのも一つの方法だと思います。それも、講師が一方向的に決めるのではなく、受講者が主体となってお互いに同意の上、学習範囲を選べればよいと思います。ただ、一つの課を皆で学習するという方法は、進度や日本語レベルに差のある個々の受講者の固有の疑問等に答える時間が少なくなるということでもあります。個別指導の時間を確保するために、例えば一回のスクーリングの時間を前後半に分け、一斉授業と個別指導に分けるやり方もありますし、月毎に一斉授業中心の月と個別指導中心の月にするということも考えられるでしょう。また、個別指導をするということは、講師不在で学習する受講者が出るということです。スクーリングは受講者にとっては月1、2回の貴重な機会ですから、一人の時間を有効に過ごせるように、講師が他の受講者と対面している間にやっておいてもらうことを考えたり、場合によっては講師がそのための課題を作成したりする必要もあります。（※このような間接的に指導をするための教材については、「VII. 複式指導」の「間接指導の種類と例」をご参照ください。）

以上のようにスクーリング講師はスクーリングに集まる受講者の構成によって、学習形態などもコーディネートする必要があります。